

朝倉氏に仕え

金津を百年治めた

溝江氏

越前国を約100年支配した朝倉氏。その家臣として、現在のあわら市金津に館を構え、その地を治めたのが溝江氏です。数少ない資料から溝江氏の歴史をたどります。

地名として溝江の名前が最初に史料で現れるのは奈良時代で、東大寺の荘園に「溝江荘」が見られます。その後、平安時代中期に奈良・興福寺の荘園・河口荘（かわぐちのしやう）に含まれ「溝江郷」となります。現在のあわら市稲越（いなごえ）から谷畠（たにばた）辺りが範囲だったと考えられています。河口荘は興福寺にとって有力な荘園であり、記録の中にしては登場します。室町時代には有力武士が代官に任命され、溝江郷では



越前守護代の甲斐氏や、後に越前国を治める朝倉氏などが代官となっています。

さて、溝江氏とはどのような一族だったのでしょうか？『朝倉義景亭御成記』では、同名衆の中に溝江氏の名前が見られ、また、江戸時代に作られた家系図には朝倉氏庶流（分家）とあります。しかし、これらを裏付ける史料は乏しく、どのような出自なのかは正確にわかっていません。史料で最初に溝江氏の名前が登場するのは、『大乘院寺社雑事記』であり、明応5（1496）年の記事の中に溝江郷代官として「溝江殿朝倉党」と出てきます。これ以降、朝倉氏の家臣として活動が見えられ

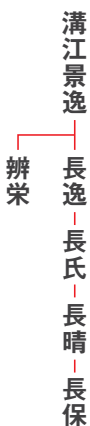


金津城溝江落城之図（あわら市所蔵）

るようになり、特に金津城主として加賀一向一揆との戦いで活躍。溝江氏は、それらの戦いの中で軍功を上げ、勢力を拡大していったのです。

転機が訪れたのは朝倉氏が滅亡したときです。溝江氏は織田氏に寝返り、本領を安堵されますが、天正2（1574）年2月10日、加賀の一向一揆総勢2万余りに取り囲まれ、19日に落城します。城主溝江長逸（ながやす）、その父景逸（かげやす）、長逸の弟で菩提寺の妙隆寺住職辨榮（べんえい）など一族30余人が自害して果てますが、ただ一人、長逸の子の溝江長氏（ながうじ）は難を逃れ、その後織田、豊臣に仕え、家を再興します。特に豊臣秀吉の信任が厚く、越前国

溝江氏略系図



内の豊臣家の蔵入れ地の管理を任せられたほか、政権の吏僚として活躍し、晩年には1万石を与えられます。また、為政者としても優れており、住民の利便を考え、竹田川に橋（現在の市姫橋）を架けています。

しかし、長氏は関ヶ原の戦いの直前、慶長5（1600）年2月に亡くなり、跡を継いだ長晴は西軍に味方したため所領を没収。金津の地を離れます。後に、彦根藩で仕官し、子孫はそのまま彦根藩に仕え続け幕末を迎えたのです。

関連史料・ゆかりの地

朱銀振分伊予札二枚胴具足
老領



（あわら市郷土歴史資料館蔵）
※常設では展示していません

本鎧は溝江大炊助長氏が主家の朝倉氏より拝領し所用したと伝承されています。溝江氏は江戸時代に彦根藩へ仕官し、その溝江家に伝わったものです。大きさは胴高34センチメートル、鉢高20センチメートルあります。